

山川登美子の歌(7):『雑詠帳』(うち「大ノート」)・
「辞世、その他」全訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越野, 格 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/4988

山川登美子の歌(7) 『雑詠帳』(うち「大ノート」・「辞世、その他」全訳)

越野格

前稿に引き続き、山川登美子の全歌の通釈をめざして現代語訳を続ける。^{注①}『雑詠帳』のうち「大ノート」の現代語訳が中心で、今回で当初目標にしていた登美子の全歌の通釈が終わことになる。

登美子の歌の現代語訳、通釈に当たり、私がこれまで採った基本的立場は、登美子の歌を「現実離れ」の歌とし、写実主義的、現実主義的、或いはモデル穿鑿的なアプローチからは、ひとまず距離を置くこと、あくまで「ぼうず」の歌、「こしらえもの」^{注②}「観念」的な歌として、その構想、構図を考えること、であった。

「大ノート」は最晩年の、闘病生活での歌が殆どである。その歌材自体は「現実」的で「ぼうず」ではない。従って、従来の私の通釈の立場、「こしらえもの」「観念」的な歌として登美子の歌を現代語訳するという立場は、今回は撤回する必要があるかも知れない。

ただ、これは登美子の歌風の変化、歌の成熟から改めて考えるべき問題であり、今回も基本的には、従来のモデル穿鑿的なアプローチはせずに、極力、語法、文法に基づいた直訳を試みた。

しかし、「大ノート」は未定稿、メモ書きゆえか、欠字、無理な用字などのため理解に窮する歌が多く、いつもに増して仮の訳になってしまった。

『雑詠帳』は、登美子が死に至るまで、病床の下に鉛筆とともに秘していたものである。坂本政親氏の『山川登美子全集上巻』へ文泉堂出版 平6・1の「解説」に拠ると、「大ノート」は、女子大時代の書きかけの倫理学ノートを転用したもので、普通大の洋罫ノート。表紙はあるが、別物。鉛筆書き(毛筆・紫色鉛筆を一部使用)。詠草、雑文、金銭出納の明細、その他を記す。執筆の時期は、明治三十九年七月以降、四十一年の父の死後にまで及ぶ。京都及び郷里で療養につとめていた折のものである。全集での通し番号は、948～1179である。

「大ノート」「小ノート」「中ノート」もメモ書きのノートで、その原本は、現在福井大学総合図書館に所蔵されている。その翻字、活字化として、坂本氏の前著の他に、杉原丈夫氏の『山川登

美子遺稿』（北荘文庫 昭37・3）がある。両者には翻字の違いが少なからずあり、本文の確定には、改めて原本の調査が必要であることを痛感した。が、今回は全面的に坂本氏の全集の翻字に拠り、適宜、杉原氏の『山川登美子遺稿』を参照した。

また、全集で「辞世、その他」として纏められた歌は、1180～1192である。その採録に際しての坂本氏の注を、注としてそのままあげた。

以上、今回の現代語訳歌は984～1192である。今回の通釈で、登美子の生前既発表歌四二四首（他に合作の歌一九首があるが、現代語訳せず）、生前未発表歌一一九二首、計一六一六首の現代語訳を終えることになる。

「大ノート」

948 みどりの風が吹く夏野に咲く花菖蒲。その花菖蒲をお才は折り
ました、馬子の笠と馬とに飾るために。

949 美しく馬を洗い、夕日の陰った心地よい風の吹く草原に座って
手刻みを吸えば（一日の疲れが少しは癒されます）。

950 五畿の人は礼儀作法が優美な上に、改まった衣装も褒め讃えた
いものです。菖蒲鬘も匂っています。

951 その新樹の中に藤は並んで揺らいでいました。五月の新芽が芽
吹いた木々に海からの風が吹いていましたので。

952 扇屋の娘は琴に堪能だ、と評判で、それを聞こうと五条の橋の
上は、夕涼みの人で溢れています。

953 笛を吹きながら岡を迷っていた影は、今銀杏の木に入って鳴き
ました。それは不如帰です。

954 夜に巾いがありました。寺の鐘が鳴る八つ過ぎ、私は月下の松
を眺めながら耳を澄ませ、その鐘の音を聞きました。

955 南国の椰子に強雨が吹き付ける涼しさ。竹に風が吹く夜、その
涼しさを私は転た寝て夢見たのでした。

956 静穏な心でもやはり淋しいものです。貴方を待っている病
の床は、貴方から百里も離れているのです。

957 私に寄せた貴方の頬の冷たさに似通っていました。石の上に光
っていた、その小さな虫の冷たさが。

958 なんて淋しいのでしょう。貴方を待つ日も訪れを指折り数える
日も、いつもと違う枕に私は何かと徒言を言うのでした。

959 東京で病んだ日々とは違った寂しさ。この京都で重き枕に伏せ
ながら、私はそれをつくづく思うのでした。

960 一見静穏な心を装ってはいます。が、折々は一切のものから耳
を塞ぎ目を閉じて死んでしまおう、と思うのでした。

961 髪を洗い撫子を挿して晴れ晴れとした気持ちで東山を見る、そ
んな一日を私は楽しんだのでした。

962 思い出を蘇らせる風よ、吹かないでおくれ。願っていた私の夢
も実現してくれなかった、この西の京の地には。

963 良い日でしたでしょうか。心ではもう死にたいという禍禍しい
日を、私は仏名を唱え、閑寂さを装って過ごしたのでした。

964 思い出を蘇らせる風よ、吹かないでおくれ。千年までも忘れて

胸にかき立てぬことを決心したのですから。

965 再び病むのは幸いなことでした、と笑みでは目を閉じました。

あらゆるものを捨てて、今や私は穏やかな心境にいます。

966 耳鳴りは、冥土に引かれゆく小車の響きのような気がします。

また私は夢におちいりました。

967 なんと人は私に世の中の仕打ちを泣けと言うのでしょうか。薔

薇の露、アザミの露の違いが分からない、そのあなた方が。

(物に激したり)

968 自分の曲がった物差しをもって測る、そんな愚かな目には、真

直ぐなものも曲がって見えることでしょう。

969 自分を省みてその一生を尋ねてごらん。ひたすら泣いて、虚し

く生きていたばかり、そんな私の一生でした。

970 命が果てようとする今、私は冷え冷えとした声で笑いました。

神を嘲る心にも似た気持ちで。

971 火に焼かれ、刃に刺されたような苦しみに似ています、今日に

してなお、私の病状は。

972 鴨川の瀬に、私の涙は落ちて真白な小石となったのです。鐘

の鳴る夕べに。

973 死神が招くのに、後ろ向きになって私は泣いたのでした。そん

な夢とともに黒谷の朝靄が立ってゆきます。

974 私が祈念することをどうぞ叶えてください。溶岩が沸騰する火

山の巖神にお参りし、私は舞を舞いましょう。

975 私の耳に入るのは、皆悲しい事ばかりです。力を加えて胸を圧

迫するかのように、血も絶えるほどの悲しさでした。

976 数珠を買おうとして、町名を聞いた私の様子を笑われました。

中京人の優しい京の言葉で。

977 聞くことの全てが胸を刺して私は傷つきました。捨てて終った

この世なのに、なおもこの身を泣けと、いうのでしょうか。

978 忘れてしまっていた国から招かれる心地がして、今は何となく

私は嬉しいのです。

979 苦しみの焔の前に立ちました、悲しみの刃も身に受けました。

今日にしてなおも私は。

980 人を恋い慕うのも、仏の道を尊ぶのも同じことではないでしょ

うか。愛情に飢えた心にとつて。

981 長駆して喉が渴いた馬が水辺に走り行く。そのような姿にこそ、

この私の激しい思いが表れているのです。

982 暗鬱な島に氷が流れていき、寄せる潮も荒い。そんな島に私は

住むのです、人に逐われて。

983 紅葉の落葉で流れが淀んでいる御室通。その御室通から、通り

過ぎる牛の背越しに仁和寺の塔が見えるのです。

984 鐘を抱き、私は夜更けに降りる霜に凍え死にたいのです。心の

奥に貴方の姿をとどめながら。

985 四年も経つのに、病はやはり癒えません。父母の心を推し量る

につけ、私の心は晴れないのです。

986 身体の衰え、心の痛み、それらは年々に増さって来ました。そ

んな私ですが、ご両親に新年のお祝いを申し上げるのです。

987 明るい希望もない、私の胸の状況でした。先々の暦も読まない
私ですが、ご両親には新年のお目出度を言祝ぐのです。

988 鶯の翼が乗ってやって来る春雨。そんな春雨に染めて着たいも
のです、私の恋衣を。

989 亡くなった人を恋慕って流す花があり、御仏に手向ける水が
あります。そんな小川にせせらぎの音がしています。

990 新年を祝う万歳楽を褒めて、打ち鳴らす鼓をありがたく頂きま
した。田舎の市人はおらかな心持ちでもって。

991 新年の書き初めをした扇に、梅の花を挟みました。恋心とお思
いにならないでください、良き香を焚きこめたのですけれども。

992 とても寒い夜です。また幻を呼び入れ、部屋中に香を籠もらせ
て私は歌を詠みましょう。

993 千鳥の鳴き声がする夜。車座になって大人らは、鼓調子に子供
たちを笑わせるのです。

994 東山の方向、空色の夕雨の中に浮き出る虹の色。その虹を眺め
ているのです、あの舞姫は。

995 東山は微かに照っていました。そこに藍色の雨をさっと走らせ
て虹が浮き出たのです。

996 山を塔を染めて太陽が沈んでいきました。鐘も鳴りました。広
い京の都は薄緑に沈んでいきます。^{注⑤}

997 新年を迎えました。西の都の朝ぼらけです。打ち火、神祓ぎが
厳かに行われる中の朝でした。

998 高瀬川よ、緩き流れに良き香りをさせて、昔武蔵で見た夢を、

その夢を引き寄せておくれ。この春の、この時に。

999 天地の栄えの顕れ、と見ているのでしょうか。舞姫が表に出て、
東山に掛かる虹を眺めているのです。

1000 舞姫が三人、親しげに手に手をとっている芝居茶屋のこと。
なにやら耳打ちしている様子です、扇を口に当てて。

1001 幕間に、口紅を差し添え、筥迫を挿した襟を繕っている舞姫の
姿。その姿を私は大変好ましいものと見たのです。

1002 寒くはなかったあの秋の日に、燃え立つように色づいた山蓼を
摘んだあの山。その山にも雪が降ってしまったのです。

1003 雪が散り降りしました、比叡下ろしが激しい西の京に。私の胸の
野には現れることがない、薄陽がさす中に。

1004 夢に見たのです。僅かな光が残っているのでしょうか、虚ろ
なる私の胸にも、小さな虫の鳴く音がしたのでした。

1005 火が入りました、虚空に掛かる大文字焼きに。声をあげ、人々
は皆立ち上がったでしょう。

1006 天をまあるく捲く虹の大輪。その大輪に私は掛けましょう、黄
金、白銀に揺れて鳴る鈴の数々を。

1007 人の恋でした、と涙を遠く追いやって花環を捧げる、そんな境
遇になったのです。

1008 二度とない人生と違って私は泣き尽くしました。なんて心が淋
しく悲しく、身体も冷たく痛いのでしょうか。

1009 追いやられて私は、魔の家に住むはめになりました。その軒飾
りに垂氷が重なり、戸も閉じられてしまいました。^{注⑥}

- 1010 古琴の切れ緒で、乱れて荒い私の髪を巻きました。その縛った根を緩めはしないでしようか、春風が吹いて来て。
- 1011 ああ私にそんな日が再び来るでしょうか。もし力の漲るばかりの人間でないとしても、並みの人でもいいから。
- 1012 因果という、切れ味鋭い鋏を手にし、私の胸の雪なす百合を窺い寄って切ろうとするのは、誰ですか。
- 1013 若人よ、目の前には神もご覧になる光があるのです。靄の帳の中にどうしているのですか、目を覚ましなさい。^{注⑤}
- 1014 美しい虹の色を空にかけて、とても細かい春雨が上がりました。その中に京都は眠っているのです。
- 1015 余りにも高貴な天上での円居を思い煩い、私はぬか伏しました、百合の花の前に。一面に天の香りが揺らぎました。
- 1016 緑して野は燃え立つ春を迎えました。ウマゴヤシの四ツ葉を見つけ、私は貴女のとこしえの幸を祈りましょう。
- 1017 それを鶯の巢に投げ入れ、春の訪れを占ってみてください。春が来るのを辛く思い、私が制作を止めてしまった、その色鞠を。
- 1018 春の風が吹き、熱が出始めた若人は、露に濡れながら小草の芽を摘みに野に来たのです。
- 1019 薄化粧もせず散歩に出た私。細い流れに架かる板の小橋の上で、名も知らぬ方と今日も微笑みながら道を譲り合うのでした。
- 1020 我世を貫くのか、人の世に合わせるべきか。相変わらず私は惑っています、この二心に。貴方どうか、貫き刺してください。^{注⑥}
- 1021 目を包み、私は綾に彩られた帳に帰ります。ウグイスよ、どう

- か立ち去っておくれ、そのカラタチの藪からは。
- 1022 安らかな心を育てましょう。遠く去りゆき、人の声も聞こえぬ山の中に住んで。
- 1023 静かなる私の胸に、我が世の有様を写して見てごらん。それはただ広々として一本の草木もない平原でしょう。
- 1024 もったいないことです、と醒めた心で私は私を慰めました。私の心を、貴方は玉のごとくに賞賛なさるのですが。
- 1025 密漁の船は走りまわった、北の海を。荒波と黒雲とが戦っている、その海上を。
- 1026 白い熊が根元に雄叫びを上げて崩れ落ちてきました。五丈に余る矛杉に積もった雪が。
- 1027 いま私の胸の中に初めて高貴な調べがありました。この思いは何か懐かしい気がします。このまま死んでしましましょう。
- 1028 なんと静かな私の胸でしょう。花を見ぬ寂しさゆえに、ものに怖じてすくむ、そんな小鳥の心にも似ています。
- 1029 現世のあらゆることを忘れ果てて、ただ高貴で美しい思いに酔いしれましょう。お酒が欲しいこと。
- 1030 泣くことでこの世が満ち足りたものになります、とこんな日でも依然と健気なこの私。神よ、憐み給え。
- 1031 世間から見捨てられた重い病いの私ですが、なお夢を守り続け、今、髪に飾っています、白百合の花を。
- 1032 人を恨みます、と言い切ることが出来ない時、私は花かんざしを抜いて、鼓の緒に刺した日もありました。

- 1033 かつては恋に悩み、今日は死ぬかも知れぬほど病いが重い私です。この乙女に降り注いでください、紅梅の露よ。
- 1034 涙を流さず堪えている者を怖がらせないでください。木枯らしが吹くのを避けて、私は早寝をしたのでした。
- 1035 朝寝をして、私は良い夢を見たのでした。桜が咲く海上の小島から、風が吹いて来るようでした。
- 1036 我が王は昼をうつらうつらと過ごし、ご病気でいらっしやいます。黄金の宮殿、牡丹の間で。
- 1037 文を届ける鳩の翼にうつすらとたつ光。その光にも似て桜が淡く咲きました。
- 1038 貴女に似ている姿です、この玻璃は。いま私はそれを手にとつて香りをくゆらしたのです、桜の花びらを盛って。
- 1039 海の風がこの世に現れ出でて、あたかも千年の齢を育むような心持ちで吹き渡っています。
- 1040 檳榔毛の御車が揺れて、ひとしきりその御簾に打ち散りました、山桜の花びらが。
- 1041 綾の帆に珊瑚の棹をさし、貴方は海上を旅立ちました。香木を手に入れようと、伽羅の御国に。
- 1042 冬木立です。古つわものが世の有様を怒る叫びにも似ています。嵐の夜に立つ、その姿が。
- 1043 私が死んで行く、そんな有様を示して雪が降っています。私には雪が、白毛の鞠が、互いに戦っているように見えるのです。
- 1044 世を照らす玉を捧げて高く呼ぶ、そんな女神とさえあがめまし
- よう、美しい貴女の姿を。
- 1045 太陽の御座のもと、星の雫が育てた、並んで咲いた深紅の牡丹の花々。そんな牡丹にもあなた方は見えます。
- 1046 世にある限りの美しい花々を盛り上げて、この産屋を飾りましよう、と春のそよ風が吹いています。
- 1047 春の姫、花の帝、そして日の皇子へと、お使いが発ちました。産声高き御子の誕生です。
- 1048 比良の峯を、凍えて北に向かう薄い雲。あれは私の影です、と故郷の母に告げましょう。
- 1049 高瀬舟、桜日和はゆらゆらと、乗り合う中には居眠りをしている人もいます。なんと美しい光景でしょう。
- 1050 しめやかに、火影に映えている木屋町。桜見物帰りの人々の上に、こぬか雨が降っています。
- 1051 今かりに、乙女がもの寂しい心地で文章を書いたとしたら、全て悪罵の文字が並び、それは恐ろしいほどのものでしょう。
- 1052 石に咲く苔の花を摘んで一日が暮れる、そんな日を思つて、私はこの上なく淋しいのです。
- 1053 心細い上に足元が暗かったので、私は愚かにも、冷たい石にさえ言葉かけたのでした。
- 1054 救助された聖船からも、私は滑って海に墜ちてしまいました。そんな夢を見て、私は胸を抱いて泣いたのです。
- 1055 見つめる信仰の火影は、時々細り揺らめきました。そして私の涙はこぼれて闇に流れました。

- 1056 花よ、散れ、と促すかのように鐘の響きが訪れました。私自身も侘びしい夕べに、鐘の響きが。
- 1057 一面に夢の花が咲く美しい野原へと、私が乗った馬はひた走り駆けて行きました。
- 1058 私の涙は、臉を流れて野に落ちました。そして小さな名もない花の根に浸みたのでした。
- 1059 その注射は、私の血を燃やす薬の注射として刺してくださいませ。ああ、いま万物が私には美しく見えます。
- 1060 私の一生は尽きぬ嘆きの連続で、幻影でした、と魂も喪心するのでした。私に薄黒い影がさします。
- 1061 世の道理は道理として理解しています。でも、何と価値のないものでしょうか、私の来し方を省みても、女という存在は。
- 1062 幾万年間、涙は不思議なものです。私のような愚かな子が次から次へと生まれ、その涙で世の中を呪っているらしいのです。
- 1063 春雨に濡れても髪は、艶がないままです。そんな人が愛おしみました、苧環の花の艶を。
- 1064 花が散りました。鐘の音が数えている間に消えていくように、私の思いも消えておくれ、熱が上がってくる頃には。
- 1065 のびのびと丸寝する子どもに、私は贈りました。盗人草の美しい穂を。
- 1066 どんな悪霊の力も及ばないでしょう、この二人には。飾ってある菖蒲は邪気を追い払う、と言いますので。
- 1067 新しい住居には、屋根瓦、庇にと、沢山の菖蒲が飾ってあります。

- す。貴女はとても美しく、家人と睦んでいることでしょう。
- 1068 花菖蒲が屋根に葺き飾ってあります。貴女の寝床も、初夏の白い羽毛を敷いて待っています。
- 1069 火を噴いて山をなしたる国、その国の乙女たち。彼女らは花のように美しく微笑み交わすのでした。
- 1070 微動もしないこと、それを山に諭えます。そんな益荒男よ、歌は知るべきですよ。山は火を噴きます、そして歌も。
- 1071 あたりの寺の鐘が多く鳴って、花も散っていく、そんな私の山住まい。夕雲も動き、いつものように熱が出てきました。
- 1072 山風は雨を誘いました。鐘も鳴りました。そんな中で、花々とこの私、どちらが早く散るのでしょうか。
- 1073 何者かが来て私の髪を乱暴に乱し、頭に鉛の兜を被せていったのでした。
- 1074 芥火を焚く、据え炉から立ち上る煙が人の形になっています。心が引かれます、別れて来た道の、その煙の影に。
- 1075 今の私は虹の色をして燃えています。空一面が曇る中、私が、貴方が、二人は燃えているのでした。
- 1076 貴方のお陰でこの天地の秘力を知りましたと、私は真昼に咲く牡丹の花に書いたのでした。
- 1077 私は綱を執りましょう、貴方は鞭を当ててください。逸楽の馬は嘶きました、蜜の露を踏みながら。
- 1078 貴方は来しました、私の許へ。炎の波をかくぐり、燃えるような珊瑚を浮木にして。

- 1079 初夏の、なにか楽しさを誘うような風です、ゆらゆらと。玉を
 欺く美しさの貴方、その貴方の頬を吹き渡っています。
- 1080 お別れの日です。ですから貴方は、右を指し左を指し四方を指
 して、幾億万里もの広大な世界を作ってくださいませ。
- 1081 灰色の天地であるので雪は降りました。私が焚く野火に災いを
 しようとして。
- 1082 どのような喻えもひきません。美空より涙が落ちて来ると、そ
 れがバラ色の雨となるのです。
- 1083 人を驚かせるほどの一夜の雨は、朝露の中に、世界をあたかも
 夏のように装ったのでした。
- 1084 石を負って山を登って行く夢を見ました。その汗ばんで冷えた
 疲れが、私の病いとなりました。
- 1085 火炎が逆巻く槽の上に立って、私は美しく、決して揺るぎない
 誓いを貴方に捧げまつもりましょう。
- 1086 侘びしげにここにもあそこにも咲いて目に留まった藤の花。そ
 の藤の花に衣を掛け、私は消えていこうと思いました。
- 1087 春風の中、私が磯の曲を吹いたので、貝はみな鳴き出しました。
 砂の中の貝たちも。
- 1088 私の心は牢獄に閉じこめ、この偽りの世には笑顔で対処してい
 ます。そんなことが何て多いのでしょうか。^{注⑦}
- 1089 今私に残されたこの後半生は、ただ私の全生涯を葬るための穴
 を掘る、そんな心地に等しいのです。
- 1090 海の幸を求めて船出した若者。夕方、磯辺の山に虹がかかった
 と、小躍りするのには、磯で若者を待つ乙女。
- 1091 そのように怖れなければなりません、夜の闇を走る尾長もの、
 と。貴女を覗い、躍りかかる邪心があるかも知れません。
- 1092 どのような喻えもひきません。万世の溜まりに溜まった涙が滝
 となって散り落ちたのでした。
- 1093 辞世の歌は、特にこの子に、とありがたくも父上に召されまし
 た。ご一緒に天国に参りたいものです。
- 1094 雪はしんと降り山を埋めました。私は篝火を百をも焚かせ、
 夜昼を通して父上の御墓を守るつもりです。
- 1095 父上の柩を見送った日より、私は熱が高くなりました。熱に魘
 され、父上の名を呼ばぬ日は一日とありません。
- 1096 確かに牛乳を飲みました。薬も確かに飲みましよう、弱き子の
 私よ。この私に安眠して明日の命を祈れ、と仰るのでしょうか。
- 1097 いつまでも限りのない逢瀬が続くというのですから、父はこの
 世を去って、後瀬山の麓に行くのです。^{注⑧}
- 1098 限りのないこの世の無情を嘆いておくれ、後瀬山よ。その後瀬
 山にかかる陽も、淋しく傾いたのでした。
- 1099 吐く息は熱く、玉の汗を流して父の夢を見ました、と私は母に
 語りましょう。それまでは私の興奮は冷めないうでしょう。
- 1100 灯りが消えてまた点り、ゆらゆらと揺らめきました。そんな火
 にも心が引かれ、私は森に駆け込みました。
- 1101 雪の山、垂氷の谿を訪ね歩き、声を枯らして父上の名をお呼び
 したら、微かにもお声を聞くことが出来るのでしょうか。

- 1102 家族の人々は、私の胸も柩の蓋に合わせてお打ちなさいました。
父の御柩を閉じる音が、真夜中に響きます。
- 1103 御通夜に連なる人々は皆痩せ衰えて、とても美しい神を見守ったのでした。
- 1104 厳かに、少しの乱れもありませんでした。父上は熟睡していらつしやるのです、人々よ、お泣きにならないでください。
- 1105 世の中があつて、人の子があつて親を喪うこの嘆き。必ずあるものと、私も知っていたのですが。
- 1106 畏れ多いことですが、宿禰様、どうぞお歳をお貸しくださいませ、と子供たちは祈つてお供え物をしたのでした。
- 1107 子狐が夜警の真似をしてする舌拍子。その舌拍子を、私は戸を打つ吹雪の合間合間に聞いたのでした。
- 1108 真夏の向日葵の葉の中に、花姫様と生まれた貴女。そんな美しい貴女を失つて、私は嘆き悲しんだのでした。
- 1109 京都千本の水辺に流れた夏霞。その夏霞の中で別れた貴女と、再びお会いすることが出来なくなつたのでした。
- 1110 花野に近く、玉の小石の敷く小川辺に佇む、浴衣姿の涼しい貴女。その貴女の姿は永久に私の中にあります。
- 1111 黒金の斧の嘴を持つ夜鴉よ、黄泉の戸を砕いておくれ。私は父上を奪つて帰りたいのです。
- 1112 私が鉦を叩き、御親を探し回る野の果てで、私に似た影が慌てふためいて逃げて行きました。
- 1113 父上が夢からお覚めになり、み湯をお上がりになる朝までは、

- 私は寝も食べもせず、御側を守りましょう。
- 1114 鉦を叩きながら国の境で凍え死ぬ日があつたとしても、私は二十たびをも親を訪ねに出かけるつもりです。
- 1115 十人の輿丁は立ち上がりました。藁靴の人たちもみな居並びました。私には何が出来ましょうか、今この時になつて。
- 1116 雪が散つて寒い日の光がさす片日和。父の御輿は静かに音もなく進みました。
- 1117 炬を囲む女が数人。身体を寄せ、一言もなく、目を交わしながら泣くのでした。
- 1118 家族の親しみの深さはさらに増して座り寄り、目で語り合い、手をとつて伏し泣くのでした。
- 1119 北国ではカモメの影も地に写ることなく、雪が泣いているかと思う吹雪の日もありました。
- 1120 まだらに消え残つた雪の中に、葉の散つた浜茄子が立っています。小浜は淋しいところです。雁も鳴いて渡つてきました。
- 1121 天守を欠いたいく尋もの雪の積む城跡。その城跡に夕陽が照り映え、白鷺の群れが舞つていました。注⑤
- 1122 雪の磯に、艫も帆柱も無残に日にさらされた船が一艘。その艫を捲いて白鷺が飛び鳴いています。
- 1123 海に投げた、私の生涯の夢の屑。アホウドリさえ、それをつまもうとはせず、苛立つのでした。注⑥
- 1124 胸を叩きながら、私に死ねとさいなむ禍つ鳥。夢に出たその夜は、女の姿でした。

- 1125 オットセイが氷の上で眠る幸せ。その幸せを知らずに涙に暮れる、余りにも小さな私。
- 1126 私の命に情けもかけず、私自身が卑しんで顧みないからこそ、このように病むのでしょうか。
- 1127 帆柱を、艀を、帆を紅く彩った丹塗り船。港に着きました、紅い旗を立てて。
- 1128 お父様ー、お父様ー、私は千度も万度もお呼びしましたが、その御返事は天高く遙かなあまり、私には聞こえないのでしょうか。
- 1129 腕の立つ水夫は、夜の海、岩礁の海をも、何事もなく平穩に進むといえます。私もそれを見たいものです。
(人に代りてよめる)
- 1130 神様はいらっしゃらないのがこの世の中、と思っています。しかし、どうしてなのか、大空を仰ぐと涙が流れます。
- 1131 夢も見ず目覚めて、フツと息をつきました。寂しさの、また今日という永劫に私は帰って来ました。
- 1132 石に躓きました。奈落の底に矢のごとくに墜ちる、その日が今日なのかと、私は恐れ泣いたのでした。
- 1133 いま死にましよう。死んでも私には悔いも涙もありません。私の罪も、今となつては、消え果てよ、と思います。
- 1134 昨日までは私を誇っていました、尊んでいました。塵芥を積み重ねた、そんな私の胸とも知らないままに。
- 1135 己を鼓舞したり冷静になつたりして、今日一日を私は呪い過ぎました。でも何事もなく終わり、涙が流れたのでした。
- 1136 悔いの多かつた過去の道には戻りません。私はひたすらこの日、この一時を、思いもよらぬ運命の中に生きます。
- 1137 閉じた私の目に、卍巴に渦が巻き、鼓の音が聞こえます。悔いと呪いと嘲りの色をした渦巻きが。
- 1138 美しく智慧を飾った禍者が、粉飾を凝らした歪んだ眉を投げ捨てました。身をそぎ、皮をはいで。
- 1139 道理は、山のように立ちはだかっています。そうであっても、私の胸に満ちて来るもの、それは津波のように高いのです。
- 1140 賢しらに高名を求めするために、断食の御堂には行きません。私は野垂れ死にするつもりです。
- 1141 山のごとくに鎮座する道理があります。私の胸に湧く玉の潮、その私の感情が世間の道理と火花を散らして戦っています。
- 1142 重苦しいのです。私の心は平野を水が流れないかのようです。後悔自体が混迷しています、……^{註⑩}……。
- 1143 今年の秋には尼そぎ姿になりましょう。水辺に咲く桔梗の姿、そんな姿にと、私は夢うつつに願ったのでした。
- 1144 少しも悲しまぬ私の心は痺れ、骨は腐りました。私を塵芥のような心にしてしまったのでした。
- 1145 無の境にいます、起こしてくださいませ。生きていますと、蝶々が眠っているかのような姿で、私は言ったのでした。
- 1146 落日は私の袂に消えました。その袂の肩すべりよ、死ぬ日の私を飾っておくれ、この罪深い私の姿を。
- 1147 強烈な雷神が鳴りはためきました。雷神が地を揺すって碎ける

- その時、私の胸の何と清々しいことでしょう。
 1148 涙が湧きます。でも、何事も無い顔して平静を装っています。
 死ぬ日を数えながら。
 1149 気分がよいものです、狐が仕掛けた罠に墜ちた日は、と狐を笑い罵る私。でも私も淋しいのです。
 1150 矢のごとくに地獄に墜ちる躰の石。そんな石とも知らず、私は拾ってみたのです。
 1151 私の柩が、随伴する人もなく送られていく野辺の道。その野原の淋しさを想像する、今日一日の私でした。
 1152 湧いてくる涙。何事も無い様子でそれを押し隠し、神様に祈るうともしない私。その心の何と悲しいことでしょう。
 1153 死神の手に、私は安らかな心で身を捧げています。血はまだ温かく、涙も絶えず流れていますけれども。
 1154 偽りの恋も許してくれますでしょう、こんな際には。悪魔にさえ喜び泣きすがり、私は死に赴こうと思います。
 1155 どうぞ私を墮としてください、永遠に寒い黄泉の戸の前に。貴方はその偽りの恋を守ることでしょう。
 1156 朱の塔に、橋の擬宝珠に、私が持つ花に、紫色に引いて降る京の春雨。
 1157 若い身空で、こんな嘆きの中で世を捨てる、とは私は想像もせず生きて来ました。そんな日々も今では遠い昔です。
 1158 なんて淋しいでしょう。淋しく吐く私の息が、寒い日も指を温めました。私が私ではない夢幻の中で。

- 1159 後世は勿論のこと、今生さえも何も私は願いはしません。そんな私の胸に散って来るのは、桜の花びら。
 1160 見返ることもない生涯では決まっています。しかしながら、我身の果てを知っています。宿命なのです。
 1161 罠に墜ちて、苦しみ惑う子鼠の嘆き。そんな嘆きが人間にもあることを、人々は知っていたのでしょうか。
 1162 現実世界の境をこえて、私はここに来ました。心は静かに、身は軽やかにして。
 1163 世を嘆き、淋しいこの私。そんな私に涙を流して、後の半生はないも同然だ、と誰が認識してくれていたのでしょうか。
 1164 馬を洗い清めて野に出かけ、馬を立たせましょう。草原を背に、あの方と違って思いを馳せて。
 1165 温かに私の心臓を巡る血、それがまれに脈打ちます。命があるのですね。
 1166 泣かない日は淋しく、泣く日は心が満たされます。楽しいはずの世の中をよそにして。
 1167 土の下、穴の中に住む心地がします。日の光も見ず淋しいのです。父上がいらっしやらないのです。
 1168 もう一目父上にお会いしたいのです。それが適わなければ、大前の櫛葉が揺れて、御声でもあつて欲しいのです。
 1169 もう一目父上にお会いしたいのです。おぼろに映る御姿が闇に見えるであろうかと、私は夜を訪ね行きます。
 1170 その口に道燈をくわえ、雲井より父上をお迎えして来ておくれ、

白銀の鳶よ。

1171 余りの悲しさに私の心は破れました。日は経つのに、胸が温められて治癒する時がないのです。

1172 悲しみに生きて来た人々の御手をとって、国を建てたいものです、わたつみの果てに。

1173 その父上の御笑みが影身にそって忘れることができません。夜も昼も父上の机に伏して私は泣くのです。

1174 雉子が鳴いて山は美しく夜明けを迎えました。その山の麓の寺に父のお墓があります。

1175 父上が亡くなった今、私は聞くに耐えられませんので、厚裘を深く被るのです。海が泣く、その音が耐えられなくて。

1176 紅タナゴがひれを振り尾を振って、藻の間を泳ぎ回ります。夜の小さな紅の群れに山吹が散ります。

1177 薄月夜、苗の芽にさし注ぐ柔らかく淡い光の下、タニシも鳴くのです。

1178 花の木に、乙女の髪に艶を添えたのでした、薄くれないの空に降る雨が。

1179 神の世界にも似ていることでしょう、それほどの静けさの中、陽の巡るにつれてこの世の花々が散っていきます。

「辞世、その他」

1180 新年の朝、軍人たちは北京の都で、待ちに待った天皇様のいや

さかを言祝ぐでしょう。（清国の軍にしば／＼打勝てるを）

1181 明日、門出をする兄、その兜の下衣を縫う妹。その心に針を裁つ心地で下衣を縫うのです。^{注⑩}

1182 見渡せば、花よりほかに色はありません。桜一色に埋もれた、美しい吉野の山々です。^{注⑪}

1183 白い躑躅、紅い躑躅と取り混ぜて花輪を作り、稚児の頭に飾ってあげましょう。^{注⑫}

1184 花籠に一杯の、片側に枝葉のある東菊。白と紫のそれは、貴女と私でしょうか。

1185 薄墨があらぬ方へとながれていってしまいました。歌の神様に見捨てられたのです、この私は。

1186 筆を噛み、唇を噛んで私は泣き伏しました。人の呪いに今は耐えることができません。

1187 秋雨に袂を絞って泣いています。ちぬの浦に寄せる波の音に泣く、うらぶれた乙女が。

1188 それほどに人を傷つけるといふ歌であるならば、私は女を捨ててます。紅筆もとりません、眉筆もとりません。

1189 二人して、貴女よ、私よ、と奪い合って、星の愛し子に口づけをいたしましょう。^{注⑬}

1190 兄上様、どうぞ白蓮のうてなにませ、と奉る闍伽の水。しかしそうはしても私はこの悪夢から覚めることができません。^{注⑭}

1191 たとえこの身が後瀬の山に倒れるとしても、どうして忘れることができませんか、酒井家の恩顧を。^{注⑮}

1192 父君に召されて私は行きましよう、永遠の春で暖かいという蓬菜の島へ。^{注⑧}

葉の島へ。

注① 「山川登美子の歌(1) — 『白百合』全釈」(『福井大学教育

地域科学部紀要第I部人文社会(国語学・国文学・中国学編)』第五十八号、平19・12)

「山川登美子の歌(2) — 『恋衣』拾遺・『明星』掲載歌」

(『福井大学言語文化学会編『国語国文学』第四十八号、平21

・3)

「山川登美子の歌(3) — 初期投稿歌、『恋衣』以後の『明星』掲載歌」(『福井大学教育地域科学部紀要第I部人文社会(国語学・国文学・中国学編)』第六十号、平21・12)

「山川登美子の歌(4) — 『詠草』三四七首」(『福井大学言語文化学会編『国語国文学』第四十九号、平22・3)

「山川登美子の歌(5) — 『おもかげ草紙』『花のちり塚』全釈」(『福井大学教育地域科学部紀要』第1号、平23・1)

「山川登美子の歌(6) — 『雑詠帳』(うち「小ノート」「中ノ一ト」)全訳」(『福井大学言語文化学会編『国語国文学』第五十号、平23・3)

注② 釈迢空「女流の歌を閉塞したもの」(『短歌研究』昭26・1)

注③ 坂本氏も杉原氏も、「日の□いゆき」と、一字分、二音節を翻字しえなかった。動詞の連用形が入るかと思案したが、思い

つかない。「山を塔」も分からない。この歌だけ省略するわけにもいかないの、両氏の翻字に従わないことになるが、仮に「日の沈みゆき」として訳してみた。

注④ 字たらずであり、杉原氏は「のの」にママを付す。仮に「のの」とし、訳してみた。

注⑤ 「む」にママが付してあるが、「ゆめ」と解して訳した。

注⑥ 坂本氏の□を、杉原氏は「刺」と翻字しており、それに従って訳してみた。

注⑦ 坂本氏の翻字では何字分かは不明であるが、杉原氏はそこを「百千」(ママ)とした。これをへおほと読み訳してみた。

注⑧ この歌は、1191の歌と並べて半紙に清書したもので、坂本氏の注には「右山川七代目貞蔵武直永眠ノ四五日前読ミタル二首、右筆者貞蔵直武ノ四女登美子」と署名する。ただしこの添え書きの方は、別人の書き入れかとみられる」とある。

注⑨ 坂本氏の注には「登美子の生家近くの小浜城を詠んだ作」とある。

注⑩ 坂本氏の「つまであらちぬ」に対し、杉原氏は「つまであてたちぬ」と翻字する。

注⑪ 五句目に二字の翻字不能の□があり、これでは現代語訳が不能である。

注⑫ 「以上の二首は、無題の『古歌筆写』(福井大学蔵)巻頭に記されたもの。『山川とみ』と署名。日清戦争の出征兵士を詠んだ作」との坂本氏の注がある。

注⑬ 「山川ハナ氏蔵短冊。『明星』加入前後の初期の作であろう

同じものが二枚ある」、との坂本氏の注がある。

注⑭ 「草稿『雑詠十首の中に』より。『明星』に送付し、鉄幹の
批正を得た四首中の一首」、と坂本氏の注がある。

注⑮ 「以上の六首は、明治三十三年十月十七日付、河野鉄南あて
の晶子書簡に同封されていた歌稿中のもの」、との坂本氏の注
がある。

注⑯ 「『兄上追懐』三首中の一首」、と坂本氏の注にある。あとの
二首は『花のちり塚』639
640。

注⑰ 坂本氏の注に拠ると、この歌は1097と並んで「山川ハナ氏蔵歌
稿」にある。

注⑱ 「永眠の二日前、巻紙に書いて弟亮蔵に渡したという辞世の
歌。『登美子』の署名がある。山川ハナ氏蔵。なお、亮蔵の筆
録では、『父君に召されて去なむ永遠の夢あたたかき蓬萊のし
ま』となっている」、との坂本氏の注がある。